
粉雪のオルゴール

夢紡人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

粉雪のオルゴール

【Nコード】

N6226B

【作者名】

夢紡人

【あらすじ】

クリスマスを目前に控えた、ある日。悠太が恋人・恵彌子から打ち明けられた話は……。

S c e n e ー 1 ・・【夢紡橋】／回想（前書き）

架空の街“LーCity”で繰り広げられる様々なドラマを描いていくシリーズの第1弾です。人気のシリーズになれたらいいなあと思っています！

Scene 1..【夢紡橋】／回想

雨は絹のように細かった。

風が微かな汐の香りを運んでいた。

川は星ひとつない夜空を溶かし込んで漆黒の流れを湛えていたが、河口に架かる【夢紡橋】の周辺だけは街灯でライトアップされた橋のシルエットを映じて、淡い光の帯を揺らめかせていた。

川を辿る風は気紛れで乱暴だ。

御厨悠太は、顔をしかめてコートの襟を左手で掻き寄せる。橋の途上に佇んで、寂しげな影法師を水面に浮かべながら、大きな溜息をつく。無造作にポケットに突っ込まれたままの右手には、小奇麗に着飾られた洒落た小箱がしっかりと握りしめられていた。

今夜、彼女に渡すつもりでいたオルゴール。

ピンクのリボンを紐解けば、タキシードに身を包んだ異国の紳士がピアノを弾き語り、ジョン・レノンの名曲『LOVE』を聴かせてくれるはずだった。

遠目にも眩しい“L-City”の街並が雨に滲んでいた。

これくらい離れてしまうと、繁華街の喧噪を賑やかに彩っていたツリーの輝きや辺りに溢れていた楽しい旋律たちも、どこか遠い世界の出来事のように思えてくるから不思議である。

——どうして、こんなことになってしまったんだろう？

幾度、繰り返しても満たされることのない想い……。それは、彼女と過ごした大切な日々のすべてだった。

彼女からサヨナラを聞かされた時、僕の頭の中で何かが音をたてて弾け、哀しくて切ないシンフォニーのタクトが振られたのだった。

その日……。この冬、初めて雪が舞った。

「頑張ってるね、サントさん」

往来をゆく子供たちに色とりどりの風船を手渡しながら、悠太は

聞き慣れた声に振り返った。

お気に入りの白いダウンジャケットに着込まれて、結城恵彌子が入懐っこい笑顔を向けていた。背後のショウウィンドウに、少し照れ臭そうな表情を浮かべたサンタクロースが映っている。

「な、何だよ？」

「うん？ちゃんとバイトしてるかなって思ってた」

「チェッ、信用ないんだな」

気配を感じて足許に目をやると、クリッとした大きな瞳が愛らしい女の子が、悠太の足に縋りつくようにして風船をねだっている。そんな様子を見ていて、恵彌子がまた声をかけた。

「モテるのね」

「ガキとオバさんには、自信あり」

恵彌子がクスッと笑う。右の頬に笑窪がたつ、悠太のお気に入りのお顔だ。

「ねえ、まだ終わらない？」

「御覧の通り」

溜息混じりに話す悠太の傍らにはトナカイ風に装飾が施された乳母車があつて、カラフルな風船の束が所狭しと括りつけられている。恵彌子はしばらくの間、そんなサンタとトナカイの様子を見比べていたが、やがて言った。

「待っててもいいでしょ？」

恵彌子の口調には有無を言わさぬ強さがあつた。

「俺は、別に構わないけど」

「じゃあ、決まり！『難破船』で待ってるから」

「ああ」

遠ざかっていく恵彌子の後ろ姿を見送りながら、悠太は財布の身と緊急会議を開いていた。

その時、彼女の心の慟哭に悠太はまだ気付いてはいなかった。

Scene 2: 【難破船】／待ち合わせ

“L-City”の繁華街は、街の人々から【銀織街】という愛称で親しまれている。その街並は、独創的なネーミングに相応しく、すごく個性的だ。

中央の広場を基点にして、それを取り囲むようなかたちで路地が幾重にも複雑に重なり合っている。夜になって【ブルジョワの丘】から一帯を見下ろせば、様々な色彩の無数の光点が同心円状に広がっている様が俯瞰できた。この光の羅列を文字通り銀河に模して、洒落た愛称が付けられたらしい。

【銀維街】を東西に横切って走っているメイン・ストリートは【星屑通り】と呼ばれ、これとX型に交叉している二本のサブ・ストリートにも、それぞれ【流れ星通り】と【ほうき星通り】というロマンティックな愛称がつけられていた。

Shot-Bar『難破船』は、【ほうき星通り】の一隅に建つビルディングの地下にあった。

——どれほどの時を過ごしたことだろう。

——どれほど多くの夢を語り合ったことだろう。

カウンターの一番奥、二人の指定席で。

恵彌子のお気に入りのカクテルは、『ブルームーン』。少し酔ってくると、壁に寄りかかるようにして、悠太をグラス越しに見上げるのが癖だった。

悠太は、そんな彼女の瞳に宿る淡い紫色の月影にグラスを合わせ、『ギムレット』を口にする……。

『難破船』は、二人がよく利用するデートスポットだった。

最初は通りすがりに何気なく立ち寄ったに過ぎなかったのだが、恵彌子が店の雰囲気ですごく気に入っていたし、マスターの人柄にもどこか惹かれるものがあった、いつのまにか二人で何度も足を運ぶようになっていた。

重厚なマホガニー製のドアを開けると、ハツとするほどの青い広がり飛び込んでくる。

ブルーを基調にした淡い照明に浮かびあがっている店内の床には、砂交じりの貝殻がびっしりと敷き詰められ、所々に割れたランタンや壊れた柱時計、酒樽といったオブジェが半ば埋もれたままバランスよく配されていた。

カウンターは、海底に半身を覗かせた帆船をイメージして設計されており、船尾を貝殻の中に没しながらその舳先を心持ちマリンプルーの天井へ向けていた。

「いらっしやいませ」

マスターがいつもの温和な笑みで悠太を温かく迎えた。

「ごめん、遅くなって。待った？」

恵彌子の隣りに腰掛けながら、悠太が詫びた。

「ううん。……外、寒い？」

「うん。すつごく」

「まあ、寒がりなサントさんね」

「ムチャ言うなよ。こっちはイミテーションなんだから」

恵彌子が、小さく笑った。

Scene 3: 【難破船】／記念日

そこへ、マスターが近づいて来て、悠太の前にそっとグラスを差し出した。

悠太は、目の前に置かれたカクテルをじっと見詰めた。それは、いつもの《ギムレット》とは明らかに違っていた。牛乳のように白くて、しかも仄かに湯気を立てている。

「マスター、これ、何？」

悠太の訝しげな表情を柔らかな物腰で受け止めながら、

「これは、《トム・アンド・ジェリー》というカクテルです。アメリカやイギリスでは、クリスマスドリंकとしても有名なんですよ。まあ、騙されたと思って飲んで御覧なさい。すぐく温まりますからね」

悠太は、恐る恐るグラスをそっと口許へ運ぶ。滑らかな舌触りと同時に、ラムとブランデーの芳香な香りが鼻をつく。それから、熱い塊が身体中に広がっていく感覚が追っかけて来た。

「どうですか？」

「うまいっす」

マスターが嬉しそうに微笑んだ。

「玉子酒って訳でもないんでしょうけど、ホットカクテルなので、風邪をひいた時に薬代わりに飲む方も多いと伺っています」

「ふーん、そうなんですか」

「ねえねえ、私にも飲ませて」

恵彌子が割り込んでくる。

「大丈夫かあ？これって、ラムとブランデーがベースだぜ、たぶん」
「ええ、その通りですよ。よくお解りになりましたね？」

マスターが、目を細めて尋いた。

「何となくですけど。香りが、結構きついから」

「そんなの、全然、解んない。でも、美味しいね」

「あつ、お前、全部飲んじやった？」

「……うん」

「酔っ払っても看病なんかしてやんないからな」

「平気だもん、これくらい」

何だか引つ込みがつかなくなってしまう悠太が更に言い募ろうとした時、マスターが助け舟を出してくれた。

「まあ、よろしいじゃありませんか。お酒は、美味しく召し上がって頂くのがいちばんですから」

マスターは優しく恵彌子を見やると、

「ただし、飲み過ぎて、折角の記念日を台無しにしてしまっただけじゃないね」

記念日――。

そう、ちょうど四年前のこの日、二人は出逢ったのだった。

クリスマスを間近に控えた、悠太が大学3年生の冬。バイト先のコンビニで、当時はまだ看護婦の卵だった新入りの恵彌子を指導することになったのがきっかけだった。

――よろしくお願いします。

そう言っ、少し恥ずかしそうにペコリと頭を下げた恵彌子の仕草が、悠太にはどういう訳か今でもはっきりと記憶に残っていた。

最初のデートの時、恵彌子が時間を勘違いして2時間も待ちぼうけを食ったこと、話しに夢中になって、気が付いたら5時間も電話で話し込んだこと、二人で初めて観に行った映画のこと……。そして――。二人で初めて迎えた朝日の眩しさ。

「今夜は、雪になりそうですね」

マスターの言葉に悠太は我に返った。

S c e n e ー 3 ・・【難破船】／記念日（後書き）

本来の作品構成としては、ここまでが第1章になります。

“ L ー C i t y ” シリーズの小道具である【ブルジョワの丘】などは、この作品中ではフレーズとしてしか登場しませんが、次回かそのまた次回作くらいではちゃんと書き込む予定です。多少読みづらいと思いますが御了承下さい。

Scene 4: 【悠太のアパート】／熱い想い

「風が気持ちいいね」

恵彌子が悠太の腕にすがりつくようにして歩きながら言った。

「酔っ払ってるからだよ」

悠太は、恵彌子の小さな胸の膨らみを二の腕あたりに感じていた。肌を刺すような寒さの中で、悠太にはそこだけ温かった。

「うわぁ！雪だよ、ほらッ！」

二人が【夢紡橋】に差し掛かった頃、恵彌子が子供のような歓声をあげた。立ち止まって手を差し伸べた彼女の赤い手袋に粉雪が静かに舞い降りる。

「きれいだね」

橋を照らす灯りを反射してキラキラと輝く冬の天使たち。二人はしばらくの間、黙って彼らの乱舞に見入っていた。

「ねえ、この橋のこと、どうして【夢紡橋】っていうか知ってる？」

「ううん」

「この橋を渡ってる時に雪が降ると、その人の夢が叶うんだって」

悠太は、少し考え込んでから言った。

「なるほどね。夢を紡ぐ橋って訳か」

「そう。だから、【夢紡橋】。それに下を流れる川は、【聖夜川】。

……よくできた話でしょ？」

「出来過ぎなんじゃない？」

二人は、顔を見合わせて笑った。

「じゃあ、俺の夢も叶うってことなのかな」

恵彌子が、意味ありげな視線を悠太に向けた。

「悠太の夢って何？」

「うん？教えてやらない」

「イジワルう」

——俺の夢はね。

悠太は、心のうちでそっと呟くのだった。

——俺の夢は、お前とずっといっしょにいたいことなんだよ。
雪は、密かにしかし絶え間なく空から降りていた。

二人が悠太のアパートに着いた時、辺りはすでにうつすらと雪化粧を纏っていた。

「寒いけど、ちょっとだけ、ここで待ってて」

どことなく照れたような微笑を残して、恵彌子は古ぼけたドアの奥に消えた。

しばらくすると、

「入っても、いいよ」

「いいよって、ここは俺ん家でしょうが」

「いいから、いいから」

「一体、何だって……」

悠太の言葉は、目の前に広がる優しい空間に溶けていった。

「テーマは、クリスマス。私の彼氏は、サンタさん……なんてね」

なるほど、テレビの脇にはツリーのイミテーション。雪を模した綿があしらわれ、ミニチュアの玩具や豆電球のイルミネーションで着飾っている。

いつもは汚れたマグカップが無造作に置いてあるだけのテーブルには、真新しいテーブルクロスが敷かれ、磨きあげられた燭台が鈍い光沢を放っていた。

恵彌子は燭台に立てられたローソクに火を灯しながら、

「明かりを消して」

「うん」

キャンドルとツリーだけの灯火の中、肉厚のステーキとクリームシチューが浮かび上がる。

「さあ、座って」

無邪気な恵彌子の笑顔が眩しかった。恵彌子は忙しい勤務の合間を縫って、これだけの下準備をしていてくれたのである。

「今日、仕事、何番だっけ？」

「ん？早番だよ」

「それじゃあ、ほとんど寝てないってこと？」

「大丈夫。ナースの体力をなめちゃいけません」

悠太は、壁にアレンジされたモールやペーパーフラワーを落ち着きなく眺めて言った。

「何だか、今年はやけに力入ってるって感じだな」

「うーん、結構……お金、使っちゃったかな。でも、雰囲気ですでしょ？それに、この前の悠太の誕生日、祝ってあげられなかったし」

——そう言えば。

悠太は、ぼんやりと思い出していた。その日は、恵彌子が両親の説得に根負けして、実家へ帰省していたのだった。

こうして二人でいると、ひとりきりで過ごした誕生日のことが、悠太には余計に寂しく思えてしまうのだった。

キャンドルライトに照らし出された温かくて穏やかな空間、その向こう側に彼女はいた。少女のような笑顔に輝きながら。

「それからね、もうひとつ、見て欲しいものがあるの」

悠太のセンチな想いに関係なく、恵彌子は軽やかな足取りでキッチンへ向うと、

「ジャーン！」

恵彌子がテーブルの上に載つけたものは、手作りのデコレーションケーキだった。工夫を凝らしたクリームの飾り付けと、中央にはウエハース製のロジが居を構えている。

それから、よく冷えたシャンパン。

「乾杯しよッ」

そう囁いた恵彌子の言葉を悠太は静かに受け止めていた。二人が同じ想いを互いの心の中に灯すようになってから、もう4年もの歳月が流れてしまっているのである。

不思議な気がしていた。

——何か、違う。

そんなわだかまりが、悠太の心の片隅に漂っていた。それは微かな漠然としたものであったが、決して拭い去ることが出来ない確かなものでもあった。さざ波のような不安が、悠太の中で湧きあがってゆく。

「どうしたの？そんなに深刻な顔しちゃって。ケーキ、美味しいよ。これでも自信作なんだからね。早く食べよ……」

悠太は、恵彌子の言葉を飢えた唇で遮っていた。

この夜のキスは、チョコレートケーキの味がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6226b/>

粉雪のオルゴール

2010年10月22日00時46分発行